

2013年大学入試センター試験 【講評(速報)】 世界史B

総論

問題の構成は、それぞれ主題（テーマ）を持つ大問を4題、各大問に3題の中間（A～C）を設けるという従来の形式が2013年も踏襲された。各中間に3問ずつ用意された小問の数は、これも2012年と同じ合計36問で構成されている。その他、思考力を重視する「センター試験」の特徴を反映した、地図、図版、年表などを活用した問題が本年も出題された。2013年は出題されなかったが、グラフや数値・統計の読解も出題される場合もあり、これも考えさせることを重視するセンター試験ならではの傾向と言えるだろう。

時代別では例年、古代から現代まで偏りなく出題されている。地域別でも特定の場所に偏っていることはなく、受験生が苦手とする中央アジアや東南アジアからの出題も見られた。分野別では政治・経済・社会・対外交渉・文化史などの中で文化史（特に宗教）からの出題が大きな割合を占めていたのが印象的であった。

現在の広域経済圏の設立や加盟国についての問題、唐が存続した時代に起こった出来事を古い順に並び変える問題の中には、選択を迷うものもみられた。同一地域の歴史や同時代の異なる地域についての問題については、選択肢の文章の正誤がはっきりしているものが多く、難度は2012年に比べ易化したといえる。

大問の内容

第1問 世界史における「法」（25点）

中国の歴代王朝における法による統治、インドにおける二大法律書とその影響、アメリカ合衆国憲法の理念という各主題文をもとに、該当する地域や時代の状況を正確に理解していることを要求するセンター試験らしい問題。世界史上の著名な地域の地図が出題されるが、それ程難度は高くないので取りこぼしは避けたい。

第2問 世界史上の都市と経済（25点）

北宋時代の首都の経済的繁栄と衰退、ハンガリーの首都ペストの繁栄を担った「ギリシア商人」、ヨーロッパの中核都市フランクフルトの経済力という各主題文を活用した問題。バランスよく各地域の経済活動を取り上げての出題。

第3問 世界史上の宗教（25点）

キリスト教公認以前のローマで流行した宗教、唐代で流行した宗教、1970年代以降のイスラーム教の影響という各主題文を題材に関連事項を問う問題。宗教が主題文に使用されているため文化史が中心に出題された。宗教に関連した問題が中心であった正誤が明確に判断できる容易な問題が多く、本問での得点の取りこぼしは避けたい。

第4問 世界史上の君主や王朝（25点）

前近代から現代に至るまでの東南アジアの王朝の興亡、ロシアのロマノフ王朝の創設、イギリスのヴィクトリア女王統治下の立憲王政という各主題文を活用した問題。王朝の設立や存続について、「政治」に関する標準的な問題。ロマノフ朝の皇帝の治績の正誤を問う問題はやや難。